

悟浄歎異

—沙門悟浄の手記—

中島敦

青空文庫

昼餉ひるげののち、師父しふが道ばたの松の樹の下でしばらく憩いこうておられる間、悟空ごくうは八戒はっかいを近くの原っぱに連出して、変身の術の練習をさせていた。

「やってみろ！」と悟空が言う。「竜りゆうになりたいとほんとうに思うんだ。いいか。ほんとうにだぜ。この上なしの、突きつめた気持で、そう思うんだ。ほかの雑念はみんな棄すててだよ。いいか。本気にだぜ。この上なしの・とことんの・本気にだぜ。」

「よし！」と八戒は眼を閉じ、印いんを結んだ。八戒の姿が消え、五尺ばかりの青あお大将おだいしやうが現われた。そばで見ていた俺おれは思わず吹出してしまった。

「ばか！ 青大将にしかねないのか！」と悟空が叱しかつた。青大将が消えて八戒が現われた。「だめだよ、俺おれは。まったくどうしてかな？」と八戒は面目なげに鼻を鳴らした。

「だめだめ。てんで気持が凝こらないんじゃないか、お前は。もう一度やってみろ。いいか。真剣に、かけ値なしの真剣になって、竜になりたい竜になりたいと思うんだ。竜になりたいという気持だけになって、お前というものが消えてしまえばいいんだ。」

よし、もう一度と八戒は印を結ぶ。今度は前と違って奇怪なものが現われた。錦にしきへび蛇へびには違ちがいが、小さな前まえ肢あしが生えていて、大おお蜥と蜴かげのようでもある。しかし、腹部は八戒自身に似てブヨブヨ膨ふくれており、短い前肢あしで二、三步は匍はうと、なんとも言え

ない無^{ぶかつこう}恰好さであつた。俺はまたゲラゲラ笑えてきた。

「もういい。もういい。止^やめろ！」と悟空が怒鳴る。頭を搔^かき搔^かき八戒が現われる。

悟空。お前の竜になりたいという気持が、まだまだ突きつめていないからだ。だからだめなんだ。

八戒。そんなことはない。これほど一生懸命に、竜になりたい竜になりたいと思いつめているんだぜ。こんなに強く、こんなにひたむきに。

悟空。お前にそれができないということが、つまり、お前の気持の統一がまだ成っていないということになるんだ。

八戒。そりやひどいよ。それは結果論じゃないか。

悟空。なるほどね。結果からだけ見て原因を批判することは、けつして最上のやり方じゃないさ。しかし、この世では、どうやらそれがいちばん實際的に確かな方法のようだぜ。今のお前の場合なんか、明らかにそうだからな。

悟空によれば、変化へんげの法とは次のごときものである。すなわち、あるものになりたいという気持が、この上なく純粹に、この上なく強烈であれば、ついにはそのものになれる。なれないのは、ただその気持がそこまで至っていないからだ。法術の修行とは、かくのごとく己おのれの気持を純一無垢むく、かつ強烈なものに統一する法を学あぶに在る。この修行は、かなりむずかしいものには違いないが、

いったんその境に達したのちは、もはや以前のような大努力を必
 要とせず、ただ心をその形に置くことによつて容易に目的を達し
 うる。これは、他の諸芸におけると同様である。変化へんげの術が人間
 にできずして狐狸こりにできるのは、つまり、人間には関心すべき種
 々の事柄があまりに多いがゆえに精神統一が至難であるに反し、
 野獣は心を労すべき多くの瑣事さじを有もたず、したがつてこの統一が
 容易だからである、云々うんぬん。

悟空ごくうは確かに天才だ。これは疑いない。それははじめてこの猿さる
 を見た瞬間にすぐ感じ取られたことである。初め、赭あから・顔がお・鬚ひげ
 面げづらのその容貌ようぼうを醜みにくいと感じた俺おれも、次の瞬間には、彼の内か

ら溢れ出るものに圧倒されて、容貌のことなど、すっかり忘れてしまった。今では、ときにこの猿の容貌を美しい（とは言えぬまでも少なくとももりっぱだ）とさえ感じるくらいだ。その面魂つらだましいにもその言葉つきにも、悟空が自己に対して抱いている信頼が、生き生きと溢れているあふ。この男は嘘うそのつけない男だ。誰に対してよりも、まず自分に対して。この男の中には常に火が燃えている。豊かな、激しい火が。その火はすぐにかたわらにいる者に移る。彼の言葉を聞いているうちに、自然にこちらも彼の信ずるとおりに信じないではいられなくなってくる。彼のかたわらにいただけで、こちらまでが何か豊かな自信に充ちてくるみ。彼は火種ひだね。世界は彼のために用意された薪たきぎ。世界は彼によって燃されるために在

る。

我々にはなんの奇異もなく見える事柄も、悟空の眼から見ると、ことごとくすばらしい冒険の端緒だったり、彼の壮烈な活動を促す機縁だったりする。もともと意味を有った外の世界が彼の注意を惹くというよりは、むしろ、彼のほうで外の世界に一つ一つ意味を与えていくように思われる。彼の内なる火が、外の世界に空しく冷えたまま眠っている火薬に、いちいち点火していくのである。探偵の眼をもつてそれらを探し出すのではなく、詩人の心をもつて（恐ろしく荒っぽい詩人だが）彼に触れるすべてを温め、（ときに焦がす惧れもないではない。）そこから種々な思いがけない芽を出させ、実を結ばせるのだ。だから、渠・悟空の眼にと

つて平凡ちんぷ陳腐なものは何一つない。毎日早朝に起きると決まつて彼は日の出を拝み、そして、はじめてそれを見る者のような驚嘆をもつてその美に感じ入っている。心の底から、溜ため息いきをついて、讚さんたん嘆するのである。これがほとんど毎朝のことだ。松の種子から松の芽の出かかっているのを見て、なんたる不思議さよと眼をみは瞠まはるのも、この男である。

この無邪気な悟空の姿と比べて、一方、強敵と闘っているとき
の彼を見よ！ なんと、みごとに、完全な姿であろう！ 全身いんせき些
かの隙すきもない逞たくましい緊張。律動的で、しかも一分ぶのむだもない棒
の使い方。疲れを知らぬ肉体が歓よろこび・たけり・汗ばみ・跳はねてい
る・その圧倒的な力量感。いかなる困難をも欣よろこんで迎える強きようじ

靱けんな精神力の横おういつ溢つ。それは、輝く太陽よりも、咲誇ひまわりる向日葵ひまわりよりも、鳴なきさか盛せみる蟬せみよりも、もつと打込んだ・裸身の・壮さかんな・没我的な・灼しやくねつ熱ねつした美しさだ。あのみつともない猿さるの闘たたかっている姿は。

一月ひとほど前、彼が翠すい雲うん山中で大いに牛魔大王ぎゆうまと戦ったときの姿は、いまだにはつきり眼底に残っている。感嘆のあまり、俺おれはそのときの戦闘経過を詳しく記録に取っておいたくらいだ。

……牛魔王一匹の香かうしようと変ゆうぜんじ悠ぜん然ぜんとして草を喰くらいいたり。悟空ごくうこれを悟り虎とらにか変かじ駈かけ来たりて香を喰わんとす。牛魔王急だいひように大だい豹ひようと化して虎を撃たんと飛びかかる。悟空これを

見て^{からしし} 狻猊となり大豹目がけて襲いかかれば、牛魔王、さらば
 と^{きじし} 黄獅に^{へきれき} 変じ霹靂のごとくに^{ほえたけ} 哮つて^{からしし} 狻猊を引裂かんとす。
 悟空このとき地上に転倒すと見えしが、ついに一匹の大象とな
 る。鼻は^{ちようだ} 長蛇のごとく^{きばたかんな} 牙は筍に似たり。牛魔王堪えかねて本
 相を^{あら} 顕わし、たちまち一匹の^{はくぎゆう} 大白牛たり。頭は^{こうほう} 高峯のご
 とく眼は電光のごとく双角は両座の鉄塔に似たり。頭より尾に
 至る長さ^{ひづめ} 千余丈、蹄より背上に至る高さ八百丈。大音に呼ばわ
 つて^{いわ} 曰く、^{なんじわるざる} 爾惡猴今我をいかんとするや。悟空また同じく本
 相を^{あら} 顕わし、^{だいかつ} 大喝一声するよと見るまに、身の高さ一万丈、
^{かしら} 頭は^{たいざん} 泰山に似て眼は日月のごとく、口はあたかも血池にひと
 し。奮然鉄棒を^{ふる} 揮つて牛魔王を打つ。牛魔王角をもつてこれを

受止め、兩人半山の中にあつてさんざんに戦いければ、まことに山も崩れ海も湧返り、天地もこれがために反覆するかと、すさまじかり。……

なんとという壯觀だつたらう！ 俺はホツと溜息を吐いた。そばから助太刀に出ようという気も起こらない。孫行者の負ける心配がないからというのではなく、一幅の完全な名画の上にさらに拙い筆を加えるのを愧じる気持からである。

災厄は、悟空の火にとつて、油である。困難に出会うとき、

彼の全身は（精神も肉体も）焰々と燃上がる。逆に、平穩無事

のとき、彼はおかしいほど、しよげている。独樂こまのように、彼は、いつも全速力で廻まわつていなければ、倒れてしまうのだ。困難な現実も、悟空にとつては、一つの地図——目的地への最短の路がハッキリと太く線を引かれた一つの地図として映るらしい。現実の事態の認識と同時に、その中であつて自己の目的に到達すべき道が、実に明瞭めいりょうに、彼には見えるのだ。あるいは、その途みち以外以外の一切が見えない、といったほうがほんとうかもしれぬ。闇夜やみよの発光文字のごとくに、必要な途みちだけがハッキリ浮かび上がり、他は一切見えないのだ。我々鈍根どんこんのものがいまだ茫然ぼうぜんとして考まえも纏まとまらないうちに、悟空はもう行動を始める。目的への最短の道に向かつて歩き出しているのだ。人は、彼の武勇や腕力を云う

々んぬんする。しかし、その驚くべき天才的な智慧ちえについては案外知らないようである。彼の場合には、その思慮や判断があまりにも渾然こんぜんと、腕力行為の中に溶け込んでいるのだ。

おれ俺は、悟空の文盲もんもうなことを知っている。かつて天上で弼馬ひつばお

温んなる馬方うまかたの役に任ぜられながら、弼馬温の字も知らなければ、

役目の内容も知らないでいたほど、無学なことをよく知って

いる。しかし、俺は、悟空の（力と調和された）智慧ちえと判断の高

さを何ものにも優まして高く買う。悟空は教養が高いとさえ思う

こともある。少なくとも、動物・植物・天文に関するかぎり、彼の

知識は相当なものだ。彼は、たいていの動物なら一見してその

性質、強さの程度、その主要な武器の特徴などを見抜いてしまう。

雑草についても、どれが藥草で、どれが毒草かを、実によく心得ている。そのくせ、その動物や植物の名称（世間一般に通用している名前）は、まるで知らないのだ。彼はまた、星によつて方角や時刻や季節を知るのを得意としているが、かくしゆく角宿という名もしんしゆく心宿という名も知りはない。二十八宿の名をことごとくそらんじていながらほんもの実物を見分けることのできぬ俺と比べて、なんとという相異だろう！ 目に一丁字いっぺいじのないこの猴さるの前にいるときほど、文字による教養の哀れさを感じさせられることはない。

ごくう悟空の身体の部分部分は——目も耳も口も脚も手も——みんないつもうれ嬉しくてたま堪らないらしい。生き生きとし、ピチピチしてい

る。ことに戦う段になると、それらの各部分は歡喜のあまり、花
 にむらがる夏の蜂はちのようにいつせいにワァーツと歡声を挙げるの
 だ。悟空の戦いぶりが、その真剣な気魄きはくにもかかわらず、どこか
 遊戯ゆうげの趣を備えているのは、このためであろうか。人はよく「死
 ぬ覺悟で」などというが、悟空という男はけっして死ぬ覺悟なん
 かしない。どんな危険に陥つた場合でも、彼はただ、今自分のし
 ている仕事（妖怪ようかいを退治するなり、三藏法師さんぞうほうしを救い出すなり）
 の成否を憂えるだけで、自分の生命のことなどは、てんで考えの
 中に浮かんでこないのである。太上たいじょう老君ろうくんの八卦はつぱ炉ろ中に焼殺さ
 れかかったときも、銀角大王の泰山たいざん山さん頂ていの法ほうに遭あうて、泰山・
 須弥山しゆみせん・峨眉がびせん山の三山さんざんの下したにおし潰つぶされそうになつたときも、

彼はけっして自己の生命のために悲鳴を上げはしなかつた。最も苦しんだのは、小雷音寺の黄眉老仏のために不思議な金鏡の下に閉じ込められたときである。推せども突けども金鏡は破れず、身を大きく変化させて突破ろうとしても、悟空の身が大きくなれば金鏡も伸びて大きくなり、身を縮めれば金鏡もまた縮まる始末で、どうにもしようがない。身の毛を抜いて錐と変じ、これで穴を穿とうとしても、金鏡には傷一つつかない。そのうちに、ものを蕩かして水と化するこの器の力で、悟空の臀部のほうがそろそろ柔らかくなりはじめたが、それでも彼はただ妖怪に捕えられた師父の身の上ばかりを氣遣つていたらしい。悟空には自分の運命に対する無限の自信があるのだ（自分ではその自信を意

識していならしいが。）やがて、天界から加勢に来たこうきんりよ亢金
 竜うがその鉄のごとき角をもつて満身の力をこめ、外からきんによう金鏡
 を突通した。角はみごとに内まで突通つたが、この金鏡はあた
 かも人の肉のごとくに角に纏まといついて、少しの隙すきもない。風の洩も
 るほどの隙間すきまでもあれば、悟空は身をけし粒と化して脱のがれ出るの
 だが、それもできない。半ば臀部は溶けかかりながら、苦心さんた慘
 憊んの末、ついに耳の中からきんそうぼう金箍棒を取出してきり鋼鑽に変え、金
 竜の角の上にあな孔を穿ち、身をけしつぶ芥子粒に変じてその孔にあな潜ひそみ、金竜
 に角を引抜かせたのである。ようやく助かつたのちは、柔らかく
 なつた己おのれしりの尻のことを忘れ、すぐさましふ師父の救い出しにかかるの
 だ。あとになつても、あのとときは危なかつたなどとけつして言つ

たことがない。「危ない」とか「もうだめだ」とか、感じたこと
 がないのだろう。この男は、自分の寿命とか生命とかについて考
 えたこともないに違いない。彼の死ぬときは、ポクンと、自分で
 も知らずに死んでいゝるだろう。その一瞬前までは澆刺はつらつと暴れ廻まわ
 っているに違いない。まったく、この男の事業は、壮大という感
 じはしても、けっして悲壯な感じはしないのである。

さる 猿は人真似ひとまねをするというのに、これはまた、なんと人真似をし
 ない猴さるだろう！ 真似どころか、他人から押付けられた考えは、
 たといそれが何千年の昔から万人に認められている考え方であつ
 ても、絶対に受付けけないのだ。自分で充分に納得なつとくできないかぎ

りは。

因襲いんしゅう

も世間的名声もこの男の前にはなんの権威もない。

悟空ごくう

の今一つの特色は、けっして過去を語らぬことである。と

いうより、彼は、過去すげきつたことは一切忘れてしまいうらしい。少な

くとも個々の出来事は忘れてしまうのだ。その代わり、一つ一つ

の経験の与えた教訓はその都度つど、彼の血液の中に吸収され、ただ

ちに彼の精神および肉体の一部と化してしまふ。いまさら、個々

の出来事を一つ一つ記憶している必要はなくなるのである。彼が

戦略上の同じ誤りをけっして二度と繰返さないのを見ても、これ

は判わかる。しかも彼はその教訓を、いつ、どんな苦い経験によつて

得たのかは、すっかり忘れ果てている。無意識のうちに体験を完全に吸収する不思議な力をこの猴さるは有もっているのだ。

ただし、彼にもけっして忘れることのできぬ怖おそろしい体験があった一つあった。あるとき彼はそのときの恐ろしさを俺おれに向かつてしみじみと語ったことがある。それは、彼が始めて釈迦しやか如来にょらいに知遇ちくぐうし奉ったときのことだ。

そのころ、悟空は自分の力の限界を知らなかった。彼が藕糸ぐうし歩ほ雲うんの履くつを穿はき鎖さし子し黄金よろいの甲よろいを着きけ、東海とうかい竜りゆう王おうから奪うばった一万三千五百斤きんの如意にょい金箍きんそう棒ぼうを揮ふるつて闘たたかうところ、天上にも天下にもこれに敵する者がないのである。列仙れっせんの集まる蟠桃はんとう会えを擾さわ

がし、その罰として閉じ込められた八卦炉をも打破つて飛出すや、
 天上界も狭しとばかり荒れ狂うた。群がる天兵を打倒し薙ぎ倒し、
 三十六員の雷将を率いた討手の大将祐聖真君を相手に、霊
 霄殿の前に戦うこと半日余り。そのときちようど、迦葉・
 阿難の二尊者を連れた釈迦牟尼如来がそこを通りかかり、悟空
 の前に立ち塞がつて鬪いを停めたもうた。悟空が怫然として喰
 つてかかる。如来が笑いながら言う。「たいそう威張っているよ
 うだが、いったい、お前はいかなる道を修しえたというのか？」
 悟空曰く「東勝神州傲来国華果山に石卵より生まれたるこの俺
 の力を知らぬとは、さてさて愚かなやつ。俺はすでに不老長
 生の法を修し畢り、雲に乗り風に御し一瞬に十万八千里を行く

者だ。」如来いわ曰く、「大きなことを言うものではない。十万八千里はおろかわが掌てのひらに上つて、さて、その外へ飛出すことすらできまいに。」「何を！」と腹を立てた悟空ごくうは、いきなり如来の掌にやらのひらの上に跳り上おどがった。「俺おれは通力つうりきによつて八万里を飛ひぎよう行するのなにしに、爾の掌の外に飛出せまいとは何事だ！」言いも終わらずきんとうん 觔斗雲きんとうんに打乗つてたちまち二、三十万里も来たかと思われろ、赤く大いなる五本の柱を見た。渠かれはこの柱のもとに立寄り、真中の一本に、斉天大聖到此一遊せいてんたいせいとうしいちゆうと墨くろぐろと書きしるした。さてふたたび雲に乗つて如来の掌に飛帰り、得々とくとくとして言つた。「掌どころか、すでに三十万里の遠くに飛行して、柱にしるしを留とどめてきたぞ！」「愚かな山猿やまざるよ！」と如来は笑つた。

「汝なんじの通力がそもそも何事を成しうるといふのか？ 汝は先刻か
 らわが掌の内を往返したにすぎぬではないか。嘘うそと思わば、この
 指を見るがよい。」悟空あやが異しんで、よくよく見れば、如来の右
 手の中指に、まだ墨痕ぼつこんも新しく、齐天大聖到此一遊おのれと己の筆跡
 で書き付けてある。「これは？」と驚いて振ふり仰あおぐ如来の顔から、
 今までの微笑が消えた。急にげんしゆく嚴肅げんしゆくに変わった如来の目が悟空
 をキツと見据みすえたまま、たちまち天をも隠すかと思われるほどの
 大きさにひろ拡がって、悟空の上そみにのしかかってくる。悟空は総身の
 血が凍るような怖ろしさを覚え、慌あわてて掌の外へ跳とび出そうとし
 たとたんに、如来が手ひるがえを翻して彼を取抑え、そのまま五指を化し
 て五行山ごうぎようざんとし、悟空をその山の下に押込め、唵おん嘛まにはつめいうん六

字を金書して山頂に貼はりたもうた。世界が根こん柢ていから覆くつがえり、今ま
 での自分が自分でなくなつたような昏こん迷めいに、悟空はなおしばら
 く顫ふるえていた。事実、世界は彼にとつてそのとき以来一変したの
 である。爾じご後ご、餓ううるときは鉄丸を喰くらい、渴かつするときは銅汁を飲
 んで、岩窟がんくつの中に封じられたまま、贖しよくざい罪いの期の充みちるのを
 待たねばならなかつた。悟空は、今までの極度の増ぞうじようまん上慢まんから、
 一転して極度の自信のなさに墮おちた。彼は気が弱くなり、ときに
 は苦しきのあまり、恥も外聞も構わずワアワアと大声で哭ないた。
 五百年経たつて、天竺てんじくへの旅の途中にたまたま通りかかつた三さんぞ
 蔵法師うほうしが五行山頂の呪符じゆふを剥はがして悟空を解き放つてくれたと
 き、彼はまたワアワアと哭いた。今度のは嬉うれし涙であつた。悟空

が三蔵したに随たつてはるばる天竺までついて行こうというのも、ただこの嬉したしさありがたさからである。実に純粹で、かつ、最も強烈な感謝であつた。

さて、今にして思えば、釈迦牟尼しやかむにによつて取抑とえられたときの恐怖が、それまでの悟空の・途方もなく大きな（善悪以前の）存在に、一つの地上的制限を与えたものようである。しかもなお、この猿の形をした大きな存在が地上の生活に役立つものとなるためには、五行山の重みの下に五百年間押し付けられ、小さく凝ぎよう集しゆうする必要があつたのである。だが、凝固ぎようこして小さくなつた現在の悟空が、俺おれたちから見ると、なんと、段違だんちがひいにすばらしく大きくみごとであることか！

三蔵法師は不思議な方である。実に弱い。驚くほど弱い。変化の術ももとより知らぬ。途中で妖怪に襲われれば、すぐに掴まってしまう。弱いというよりも、まるで自己防衛の本能がないのだ。この意気地のない三蔵法師に、我々三人が齊しく惹かれていゝというのはいつたやういゝわけだろうか？（こんなことを考えるのは俺だけだ。悟空も八戒もただなんとなく師父を敬愛しているだけなのだから。）私は思うに、我々は師父のあの弱さの中に見られるある悲劇的なものに惹かれるのではないか。これこそ、我々・妖怪からの成上がり者には絶対にないところのものなのだから。三蔵法師は、大きなものの中における自分の（あるいは人

間の、あるいは生き物の)位置を——その哀れさと貴とうとさをハッキリ悟っておられる。しかも、その悲劇性に堪えてなお、正しく美しいものを勇敢に求めていかれる。確かにこれだ、我々になくて師あに在るものは。なるほど、我々は師よりも腕力がある。多少の変化の術も心得ている。しかし、いったん己おのれの位置の悲劇性を悟ったが最後、金輪際こんりんざい、正しく美しい生活を真面目まじめに続けていくことができないに違いない。あの弱い師父しふの中にある・この貴い強さには、まったく驚嘆のほかはない。内なる貴そとさが外の弱さに包まれているところに、師父の魅力があるのだと、俺おれは考える。もつとも、あの不埒ふらちな八戒はっかいの解釈によれば、俺たちの——少なくとも悟空ごくうの師父に対する敬愛の中には、多分に男色的要素が含ま

まれているというのだが。

まったく、悟空ごくうのあの実行的な天才に比べて、三蔵法師は、な
 んと実務的には鈍物どんぶつであることか！ だが、これは二人の生き
 ることの目的が違うのだから問題にはならぬ。外面的な困難にぶ
 つかったとき、師父は、それを切抜ける途みちを外に求めずして、内
 に求める。つまり自分の心をそれに耐えうるように構えるのであ
 る。いや、そのとき慌あわてて構えずとも、外的な事故によつて内な
 るものが動揺を受けないように、平生へいぜいから構えができてしまつ
 ている。いつでも窮きゆう死ししてもなお幸福でありうる心を、師は
 すでに作り上げておられる。だから、外に途を求める必要がない
 のだ。我々から見ると危あぶなくてしかたのない肉体上の無防禦むぼうぎよも、

つまりは、師の精神にとって別にたいした影響はないのである。悟空のほうは、見た眼にはすこぶる鮮やかだが、しかし彼の天才をもつてしてもなお打開できないような事態が世には存在するかもしれない。しかし、師の場合にはその心配はない。師にとっては、何も打開する必要がないのだから。

悟空には、嚇怒かくどはあつても苦悩はない。歡喜はあつても憂ゆうしゆ愁うはない。彼が単純にこの生を肯定こうていできるとなんの不思議もない。三蔵法師の場合はどうか？ あの病身と、禦ふせぐことを知らない弱さと、常に妖怪ようかいどもの迫害を受けている日々とをもつてして、なお師父しふは怡たのしげに生を肯うべわれる。これはたいしたことではないか！

おかしいことに、悟空は、師の自分より優まさっているこの点を理
 解していない。ただなんとなく師父から離れられないのだと思っ
 ている。機嫌きげんの悪いときには、自分が三蔵法師に随したがっているのは、
 ただ緊箍咒きんそうじゆ（悟空の頭に箍はめられている金の輪で、悟空が三蔵
 法師の命に従わぬときにはこの輪が肉に喰くい入って彼の頭を緊しめ
 付け、堪えがたい痛みを起こすのだ。）のためだ、などと考えた
 りしている。そして「世話の焼ける先生だ。」などとブツブツ言
 いながら、妖怪に捕えられた師父を救い出しに行くのだ。「あぶ
 なくて見ちやいられない。どうして先生はああなんだろうなあ！」
 と言うとき、悟空はそれを弱きものへの憐れん愍びんだと自惚うぬぼれている
 らしいが、実は、悟空の師に対する気持の中に、生き物のすべて

がもつ・優者に対する本能的な畏敬いけい、美と貴さへの憧憬どうけいがたぶんに加わっていることを、彼はみずから知らぬのである。

もっとおかしいのは、師父自身が、自分の悟空に対する優越をご存じないことだ。妖怪の手から救い出されるたびごとに、師は涙を流して悟空に感謝される。「お前が助けてくれなかったら、わしの生命はなかつたらうに！」と。だが、実際は、どんな妖怪に喰くわれようと、師の生命は死にはせぬのだ。

二人とも自分たちの真の関係を知らずに、互いに敬愛し合っているのは、もちろん、ときにはちよつとしたいさかいはあるにしても（いするのは、おもしろい眺めである。およそ対たい蹠せき的なこの二人の間に、しかし、たった一つ共通点があることに、俺おれは気がついた。

それは、二人がその生き方において、ともに、所与しよよを必然と考へ、必然を完全と感じていることだ。さらには、その必然を自由と看み做なしていることだ。金剛石こんごうせきと炭とは同じ物質からでき上がっているのだそうだが、その金剛石と炭よりももつと違い方のはなはだしいこの二人の生き方が、ともにこうした現実の受取り方の上とうちに立っているのはおもしろい。そして、この「必然と自由の等置」こそ、彼らが天才であることの徴しるしでなくてなんであろうか？

悟空ごくう、八戒はっかい、俺おれと我々三人は、まったくおかしいくらいそれぞれに違っている。日が暮れて宿がなく、路傍の廃寺に泊まることに相談が一決するときでも、三人はそれぞれ違った考えのもと

に一致しているのである。悟空はかかる廃寺こそ究くつきよう竟ようの妖ようか怪かい退治の場所だとして、進んで選ぶのだ。八戒は、いまさらよそを尋ねるのも億おっくう劫だし、早く家にはいつて食事もしたいし、眠くもあるし、というのだし、俺の場合は、「どうせこのへんは邪悪な妖ようせい精せいに満ちているのだろう。どこへ行つたつて災難に遭あうのだとすれば、ここを災難の場所として選んでもいいではないか」と考えるのだ。生きものが三人寄れば、皆このように違うものであろうか？　生きものの生き方ほどおもしろいものはない。

孫そんぎ行よう者じやの華はなやかさに圧倒されて、すっかり影の薄らいだ感じだが、猪悟能ちよごのうはつかい八戒かいもまた特色のある男には違いない。とにか

く、この豚は恐ろしくこの生を、この世を愛しておる。 嗅きゆう覚かく

・味覚・触覚のすべてを挙げて、この世に執しゆうしておる。あるとき

八はつかい戒かいが俺おれに言ったことがある。「我々が天竺てんじくへ行くのはなん

のためだ？ 善業を修ずして来世に極樂に生まれんがためだろうか

？ とところで、その極樂ごくらくとはどんなところだろう。蓮はすの葉の上

に乗つかってただゆらゆら揺れているだけではしようがないじや

ないか。極樂にも、あの湯氣あつものの立つ糞あつものをフウフウ吹きながら吸う

楽しみや、こりこり皮の焦こげた香ほばしい焼肉を頬張ほおぼる楽しみがあ

るのだろうか？ そうでなくて、話かに聞く仙人かすみのようにただ霞かすみを

吸すって生きていくだけだったら、ああ、厭いやだ、厭いやだ。そんな極樂

なんか、まっぴらだ！ たとえ、辛つらいことがあっても、またそれ

を忘れさせてくれる・堪えられぬ^{たの}怡しきのあるこの世がいちばんいいよ。少なくとも俺^{おれ}にはね。」そう言つてから八戒は、自分がこの世で楽しいと思う事柄を一つ一つ数え立てた。夏の木蔭^{こかげ}の午睡。溪流の水浴。月夜の吹笛^{すいてき}。春曉の朝寐^{あさね}。冬夜の炉辺歓談。……なんと愉^{たの}しげに、また、なんと数多くの項目を彼は数え立てたことだろう！ ことに、若い女人の肉体の美しさと、四季それぞれの食物の味に言い及んだとき、彼の言葉はいつまで経^たつても尽きぬもののように思われた。俺はたまげてしまった。この世にかくも多くの怡^{たの}しきことがあり、それをまた、かくも余すところなく味わっているやつがいようなどは、考えもしなかつたからである。なるほど、楽しむにも才能の要^いるものだなと俺^{おれ}は気がつ

き、爾来じらい、この豚を輕蔑けいべつすることを止めたや。だが、八戒はっかいと語
 ることが繁しげくなるにつれ、最近妙なことに気がついてきた。それ
 は、八戒の享樂主義の底に、ときどき、妙に不気味なものの影が
 ちらりと覗のぞくことだ。「師父しふに対する尊敬と、孫行者そんぎようじゃへの畏
 怖ふとがなかつたら、俺はとづくにこんな辛い旅つらなんか止やめてしま
 っていたらう。」などと口では言っている癖に、實際はその享樂
 家的な外がい貌ぼうの下に戦々せんせん兢きやう々きやうとして薄はく氷ひやうを履ふむよ
 うな思いの潜ひそんでいることを、俺は確たしかに見抜いたのだ。いわば、
 天竺てんじくへのこの旅が、あの豚にとつても（俺にとつてと同様）、
 幻滅と絶望との果はてに、最後に縋すがり付いたただ一筋の糸に違ちがいな
 いと思おもわれる節ふしが確たしかにあるのだ。だが、今は八戒の享樂主義の

秘密への考察に耽ふけっているわけにはいかぬ。とにかく、今のところ、俺は孫そんぎ行者ようじゃからあらゆるものを学び取らねばならぬのだ。他のことを顧みている暇はない。三蔵法師の智慧ちえや八戒の生き方は、孫行者を卒業してからのことだ。まだまだ、俺は悟空ごくうからはほとんど何もものをも学び取っておりはせぬ。流沙りゆうさが河の水を出てから、いったいどれほど進歩したか？ 依然たる呉ご下かの旧阿蒙きゆうあもうではないのか。この旅行における俺の役割にしたって、そうだ。平穩無事たいだのときに悟空の行きすぎを引き留め、毎日の八戒たいだの怠惰たいだを戒いましめること。それだけではないか。何も積極的な役割がないのだ。俺みたいなのは、いつどこの世に生まれても、結局は、調節者、忠告者、観測者にとどまるのだろうか。けっして行動者にはなれ

ないのだろうか？

孫行者の行動を見るにつけ、俺は考えずにはいられない。「燃え盛る火は、みずからの燃えていることを知るまい。自分は燃えているな、などと考えているうちは、まだほんとうに燃えていないのだ。」と。悟空ごくうの闊達かつたつむげ無碍むがいの働きを見ながら俺おれはいつも思う。

「自由な行為とは、どうしてもそれをせずにはいられないものが内に熟してきて、おのずと外に現いわれる行為の謂いだ。」と。ところで、俺はそれを思うだけなのだ。まだ一歩でも悟空についていけないのだ。学ぼう、学ぼうと思いつつも、悟空の雰ふん囲い氣きの持つけ桁けたちが違ちがいの大きさに、また、悟空ごくう的てきなるものの肌はだ合あいあの粗あらさに、恐れをなして近づけないのだ。実際、正直なところを言えば、悟

空は、どう考えてもあまり有難い朋輩とは言えない。人の氣持に思い遣りがなく、ただもう頭からガミガミ怒鳴り付ける。自己の能力を標準にして他人にもそれを要求し、それができないからとて怒りつけるのだから堪らない。彼は自分の才能の非凡さについての自覚がないのだとも言える。彼が意地悪でないことだけは、確かに俺たちにもよく解る。ただ彼には弱者の能力の程度がうまく呑み込めず、したがって、弱者の狐疑・躊躇・不安などにいつこう同情がないので、つい、あまりのじれったさに瘡癩を起こすのだ。俺たちの無能力が彼を怒らせさせしななければ、彼は実に人の善い無邪気な子供のような男だ。八戒はいつも寐すごしたり怠けたり化け損つたりして、怒られどおしである。俺が

比較的彼を怒らせないのは、今まで彼と一定の距離を保っていて彼の前にあまりボクを出さないようにしていたからだ。こんなことではいつまで経つても学べるわけがない。もつと悟空に近づき、いかに彼の荒さが神経にこたえようとも、どンドン叱られ殴られ罵られ、こちらからも罵り返して、身をもってあの猿からすべてを学び取らねばならぬ。遠方から眺めて感嘆しているだけではなんにもならない。

夜。俺は独り目覚めている。

今夜は宿が見つからず、山蔭の溪谷の大樹の下に草を藉いて、四人がごろ寝をしている。一人おいて向こうに寝ているはずの悟

空くうの躰いびきが山さん谷こくに舂こするばかりで、そのたびに頭上こたまの木の葉の露
がパラパラと落ちてくる。夏とはいえ山の夜気はさすがにうすら
寒い。もう真夜中は過ぎたに違ちがいない。俺は先刻あおもむから仰あおもむ向けに寐
ころんだまま、木の葉あいだの隙のぞから覗のぞく星ほしどもを見上げています。寂さびし
い。何かひどく寂しい。自分があさびの淋さびしい星の上ほしにたった独ひとりりで
立たって、まっ暗くろな・冷ひやたい・なんにもない世界の夜よを眺ながめている
ような気がする。星ほしというやつは、以前いぜんから、永遠えいゑんだの無限むげんだの
ということことを考かんえさせるので、どうも苦にが手てだ。それでも、仰あおもむ向むい
ているものだから、いやでも星ほしを見みないわけにいかない。青白あせい
大きな星ほしのそばに、紅あかい小こさな星ほしがある。そのずずつと下したの方に、
やや黄色きいろ味あじを帯おびた暖ぬるかそうな星ほしがあるのだが、それは風かぜが吹ふい

て葉が揺れるたびに、見えたり隠れたりする。流れ星が尾を曳ひいて、消える。なぜか知らないが、そのときふと俺は、三蔵法師さんぞうほうしの澄んだ寂しげな眼を思い出した。常に遠くを見つめているような・何物かに対する憫あわれみをいつも湛たたえているような眼である。それが何に対する憫れみなのか、平生へいぜいはいつこう見当が付かないでいたが、今、ひよいと、判わかつたような気がした。師父しふはいつも永遠を見ていられる。それから、その永遠と対比された地上のすべてのものの運命さだめをもはつきりと見ておられる。いつかは来る滅亡ほろびの前に、それでも可憐かれんに花開こうとする叡智ちえや愛情なさけや、そうした数々の善よきものの上に、師父は絶えず凝じつ乎あわと愍あわれみの眼差まなざしを注そそいでおられるのではなからうか。星を見ていると、なんだか

そんな気がしてきた。俺は起上がって、隣に寐ねておられる師父の顔を覗のぞき込む。しばらくその安らかな寝顔を見、静かな寝息を聞いているうちに、俺は、心の奥に何かポツと点火されたようなほの温かさを感じてきた。

——「わが西遊記」の中——

青空文庫情報

底本：「李陵・山月記・弟子・名人伝」角川文庫、角川書店

1968（昭和43）年9月10日改版初版発行

1983（昭和58）年9月30日改版24版発行

入力：佐野良二

校正：かとうかおり

1999年2月9日公開

2011年2月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

悟浄歎異

—沙門悟浄の手記—

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 中島敦

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>